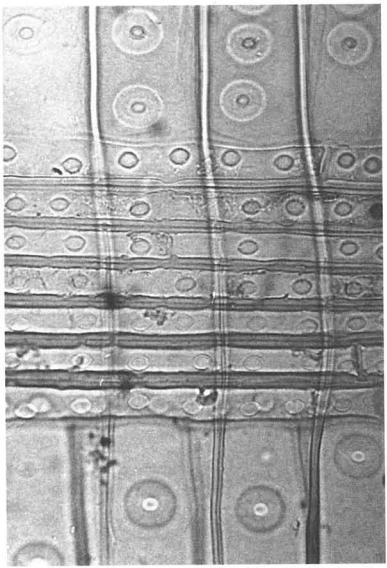
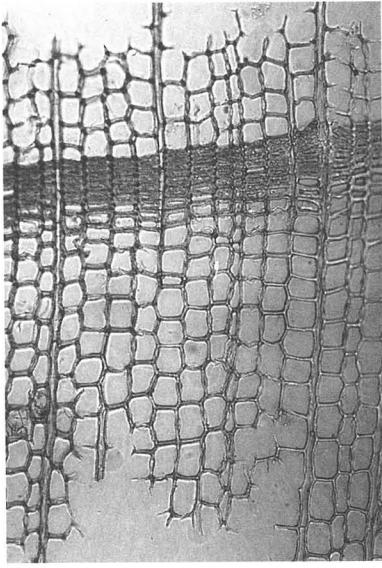


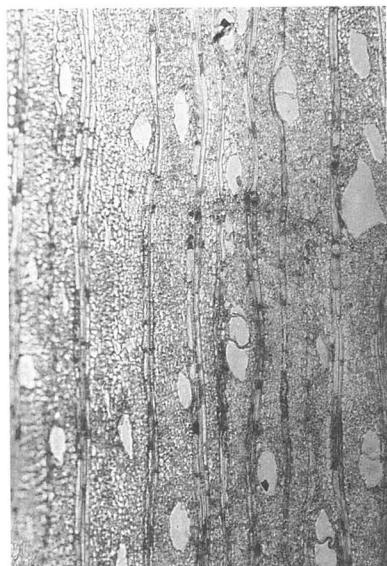
19. 材(KK-305) ヌルデ×40



20. 板(KK-318) スギ×300



21. 板(KK-328) スギ×75



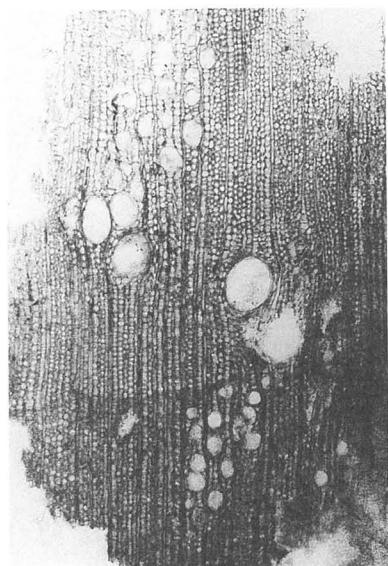
22. 板(KK-332) カエデ属×75



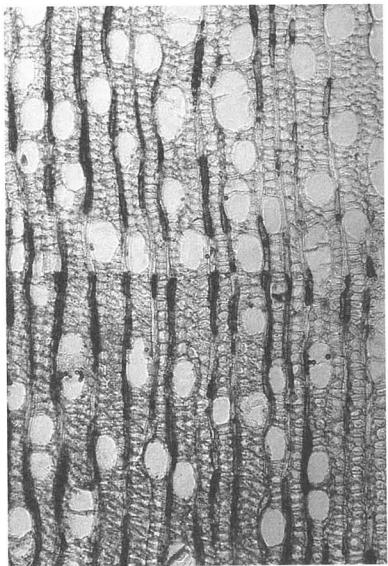
23. 槌(KK-348) トチノキ×75



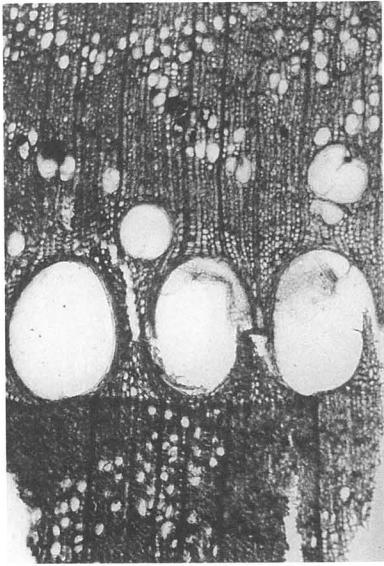
24. 槌[漆](KK-349) カツラ×150



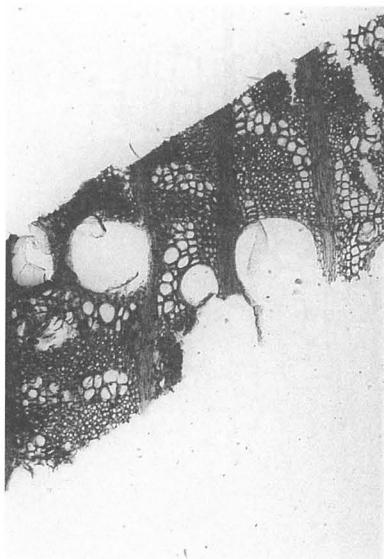
25. 槌[漆](KK-350) シイ属×40



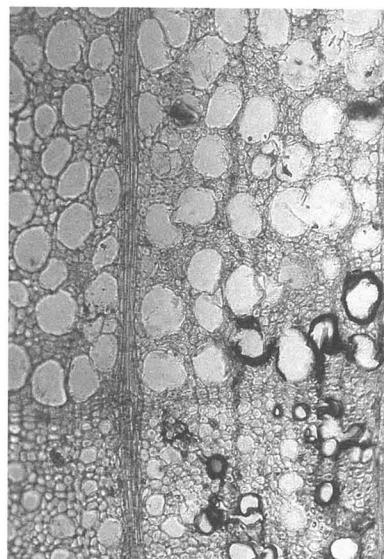
26. 槌[漆](KK-352) トチノキ×75



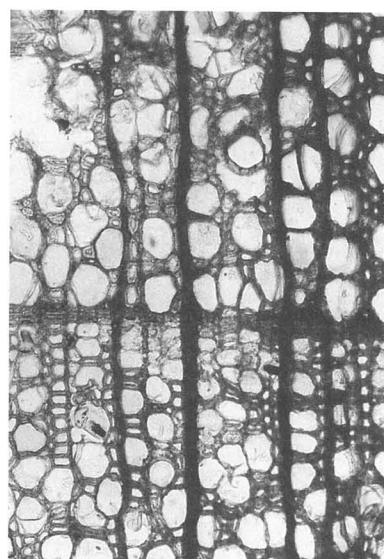
27. 槌[漆](KK-357) クリ×40



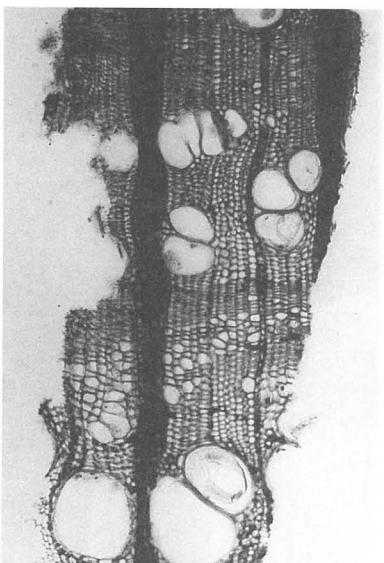
28. 槓[漆] (KK-364) ケヤキ×40



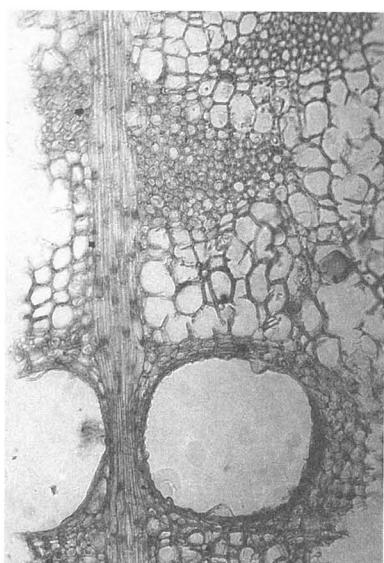
29. 槓[漆] (KK-370) ブナ属×75



30. 槓[漆] (KK-372) カツラ×75



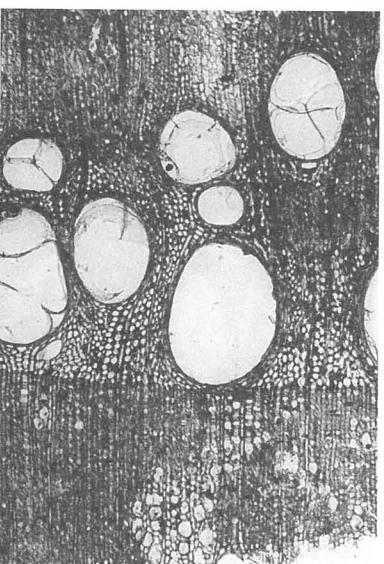
31. 槓[漆] (KK-373) フジキ×40



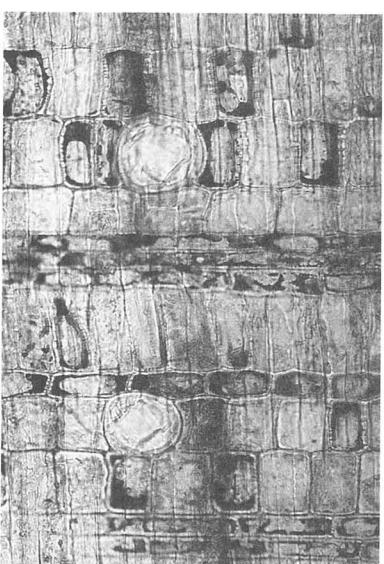
32. 槓[漆] (KK-374) ケヤキ×75



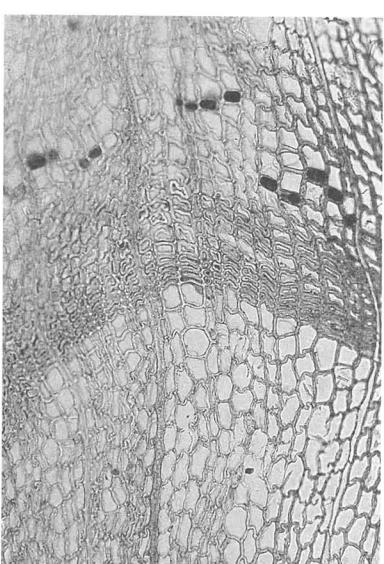
33. 槓[漆] (KK-377) ブナ属×50



34. 槓[漆] (KK-378) クリ×40



35. 木槌(KK-380) ツバキ×150



36. 箱状木製品

# 青木遺跡出土の鉄製品に観察された「錆」について

朽津 信明（東京文化財研究所）

北野 信彦（くらしき作陽大学）

## 1. はじめに

青木遺跡は、島根県出雲市扇状地に位置する、弥生から近世にかけての複合遺跡である<sup>(1)</sup>。この青木遺跡の、中世から近世初頭頃にかけての遺構面から出土した鉄製品の中には、表面が鮮やかな赤色を呈するものや、鮮やかな青色を呈するものが多数認められた。鉄製品の錆がこのような見かけをすることは比較的珍しいことから、本研究ではこれらの物質を特定することによりその形成原因を考察し、そのことに基づき、同遺跡の状況に関して一つの仮説を提示する。

## 2. 遺構と柱穴付着顔料について

青木遺跡では様々な時代の遺構面が確認されているが、本稿では特に中世の遺構面に着目する。この遺跡では、掘建柱建物跡と見られる多数の柱穴が確認されており、中には柱根が残されているものも認められた<sup>(1)</sup>。そして、柱穴の一部では、遺構面の青灰色粘質土に付着する形で、鮮やかな赤色顔料が認められた（図1）。この赤色顔料は、遺構の状況からこの建物を塗装していた顔料の可能性も考えられる。その顔料の一部提供を受け、分析用の試料とした。



図1 柱穴内に付着した赤色物質  
柱を塗装していた赤色顔料の可能性がある。

## 3. 鉄製品の錆について

一方、青木遺跡の当該遺構面からは、多数の出土遺物が記載されているが、本稿ではその中で特に鉄製品に注目する。出土鉄製品は、各遺構面からこれまでに百点あまり確認されているが、その中には表面が鮮やかな赤色または鮮やかな青色を示すものが少なからず存在する。表面が特徴的な赤色を示す出土鉄製品は全部で二十余点認められ、それが一部さらに青色物質に覆われている場合が数例見られた（図2）。これらの特徴を持つ鉄製品は、中世の遺構面、そして中世から近世初頭頃にかけての遺構面のいずれからも出土した。

表面に赤色物質と青色物質との両方が認められる例として、以後は遺物番号1539の試料について記載する。この試料自身は、中世から近世初頭頃にかけての遺構面から出土したものである。これを断面観察すると（図3、4）まず内部に新鮮な金属部分が認められ、その外側に1mm程度の厚さで黒色物質が、さらにその外側に250μm程度の厚さで鮮やかな赤色物質が、それぞれ層状にほぼ遺物全体を囲むようにして存在し、さらにその外側に、0～3mm程度の厚さで鮮やかな青色物質が認められる。各層間の境目は比較的明瞭で、漸移層のようなものは認められない。

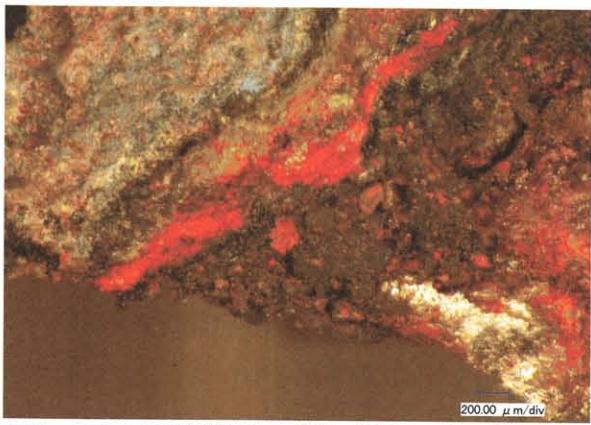


図3 図2の試料(遺物番号1539)の断面の実体顕微鏡写真

これと比較するため、近接した地域で青色の「鎧」が記載されている鉄製品の事例として、広瀬町の富田川河床遺跡<sup>(3)</sup>出土の試料SK01も調査対象とした。この試料では、金属鉄の外側には1mm程度の厚さの褐色物質が存在し、その外側に2mm程度の厚さで青色物質が認められる(図5)。

それぞれの試料において最も特徴的な色を呈する部分を、径0.5mm未満の欠片として島根県埋蔵文化財調査センターより提供を受け、分析に供した。

#### 4. 化学・鉱物分析

##### 4.1. 分析方法

出土鉄製品について、まず1539をX線分析顕微鏡により元素のマッピング分析<sup>(5)</sup>を行った。分析顕微鏡は株堀場製作所のX線分析顕微鏡XGT-2000を用い、50kV, 1mAの条件で100μm径のX線を照射し、3000秒間の計測でマッピングを行った。また、それぞれの色の代表的な部分を、分光測色計により定量した。分光計はPhoto Research社のPR650を用い、それぞれ径1mm部分の反射率曲線から算出した。次に、上記で試料として記載した各物質について、X線粉末回折により、鉱物同定<sup>(6)</sup>を行った。回折装置は、マックサイエンス社のM18XHF-SRAを用い、40kV, 100mAの条件でCuKα線を用いて測定した。

図4  
1 mm

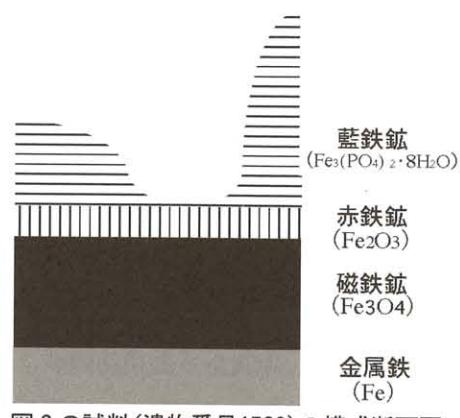


図2の試料(遺物番号1539)の模式断面図

1 mm

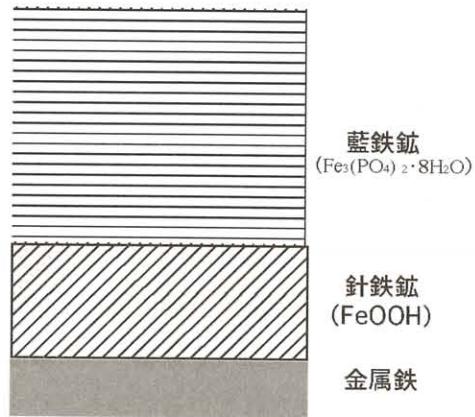


図5 富田川河床遺跡出土の鉄製品(SK01)の模式断面図

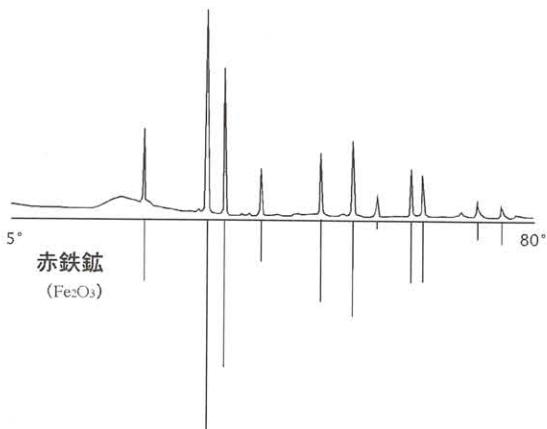


図7 赤色物質の鉱物分析結果(CuKα線源、 $2\theta = 5\text{ }{\sim}\text{ }80^\circ$ )  
赤鉄鉱の鋭利なピークが検出される。

5°

5°

80°  
藍鉄鉱  
( $\text{Fe}_3(\text{PO}_4)_2 \cdot 8\text{H}_2\text{O}$ )

図8

青色物質の鉱物分析結果(CuKα線源、 $2\theta = 5\text{ }{\sim}\text{ }80^\circ$ )  
藍鉄鉱の鋭利なピークが検出される。

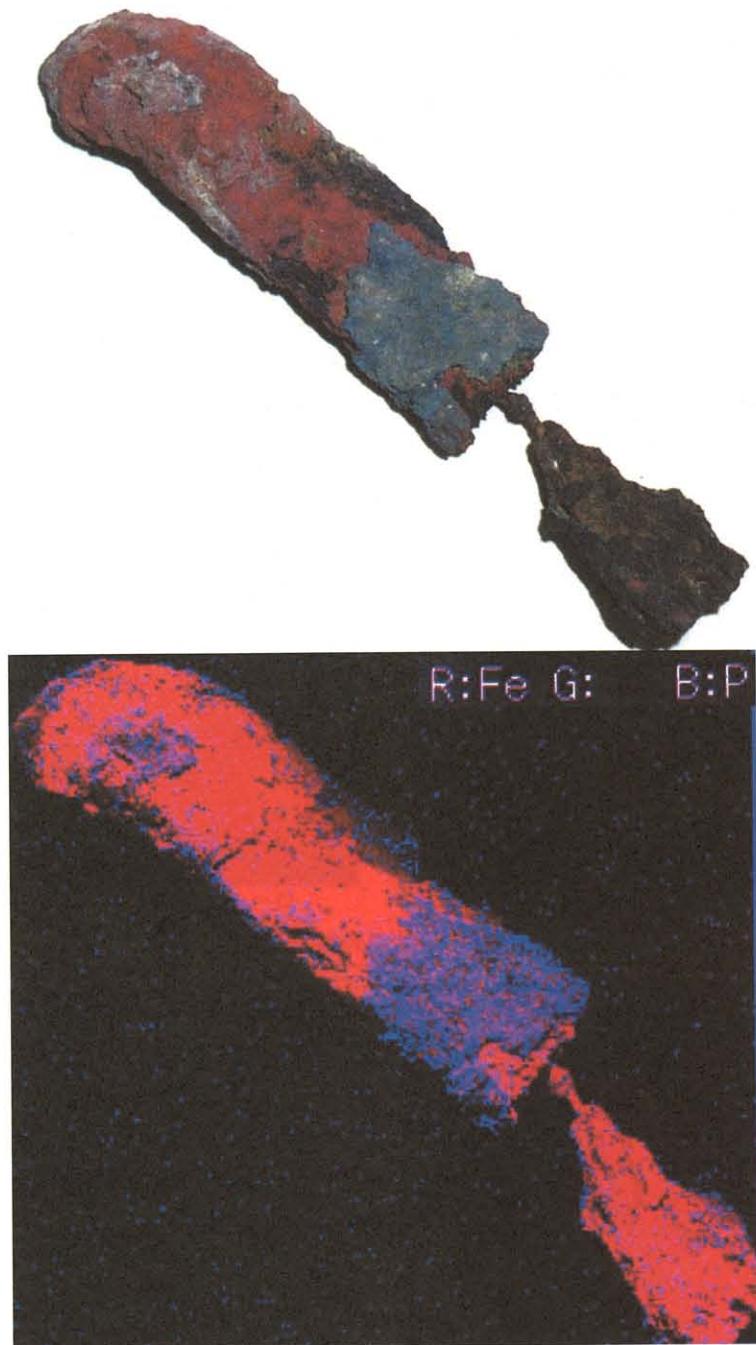


図2 表面に赤色物質と青色物質とを両方伴う鉄製品（遺物番号1539）

図6 図2の試料（遺物番号1539）の元素マッピング分析結果

青色物質の分布とちょうど重なるようにして磷が検出される。

番号	試 料	色	L*	a*	b*	主要元素	主要鉱物
遺物番号 1539	鉄 製 品	黒				Fe	磁鐵鉱
		赤	35.6	24.4	16.3	Fe	赤鉄鉱
		青	43.3	-3.3	-10.2	Fe, P	藍鉄鉱
-	柱穴付着顔料	赤	35.2	18.0	10.1	Fe	赤鉄鉱
SK01	鉄 製 品	茶				Fe	針鉄鉱
		青				Fe, P	藍鉄鉱

表1 分析結果一覧

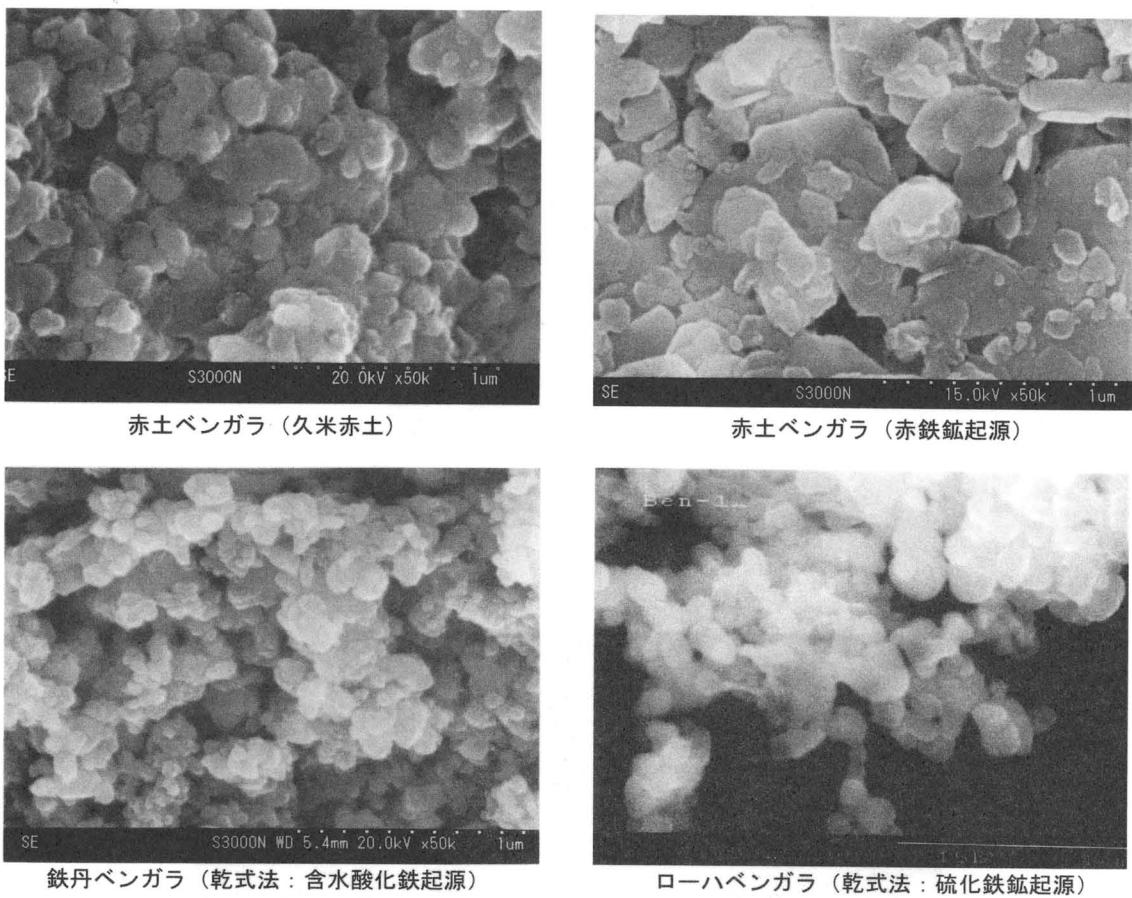


図9 代表的な赤色顔料ベンガラのSEM写真 北野他<sup>(7)</sup>による。

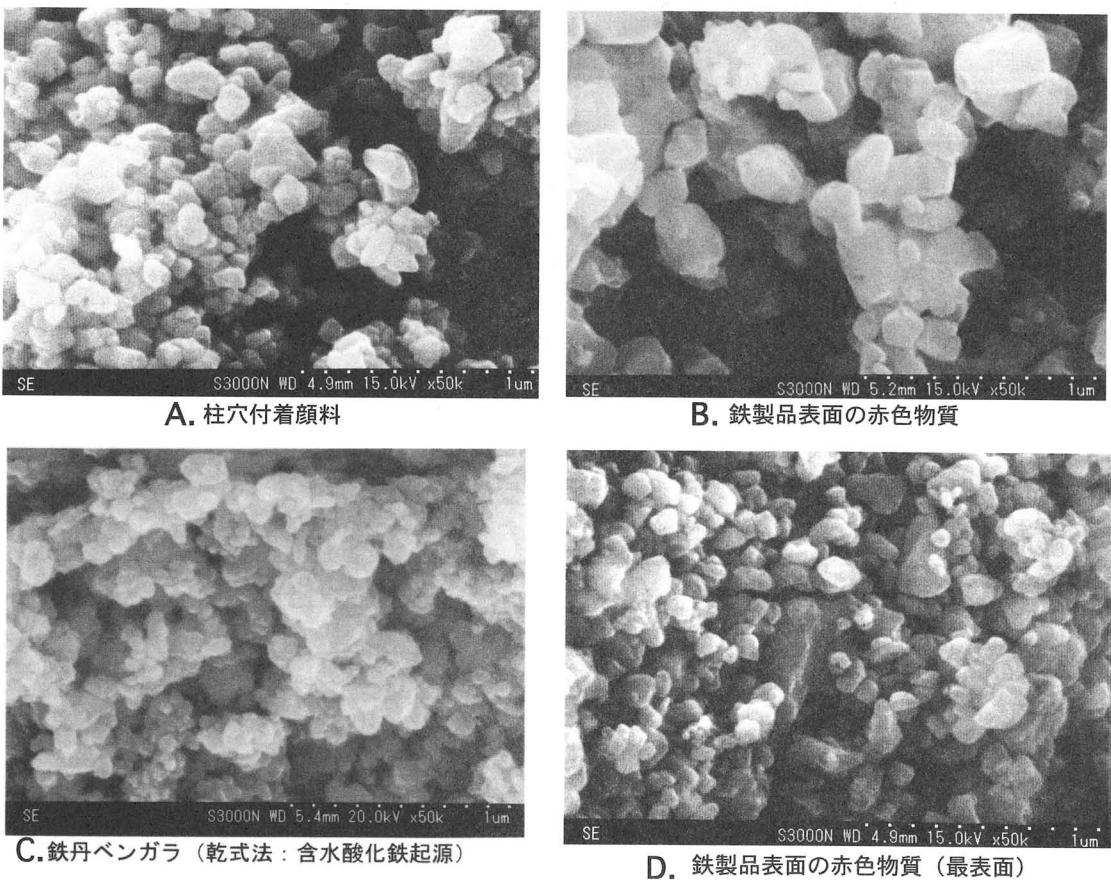


図10 青木遺跡の各赤色試料のSEM写真

#### 4.2. 結果

結果は表1にまとめて示す。遺物番号1539のX線分析顕微鏡によるマッピング分析の結果、試料全体から鉄が明瞭に検出され、その表面の青色部分からは燐も併せて検出された(図6)。X線粉末回折による鉱物分析の結果、遺物番号1539の黒色層からは磁鉄鉱( $\text{Fe}_3\text{O}_4$ )が、赤色層からは赤鉄鉱( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )が、そして青色層からは藍鉄鉱( $\text{Fe}_3(\text{PO}_4)_2 \cdot 8\text{H}_2\text{O}$ )が、それぞれ主成分として鋭利なピークを持って検出された(図7, 8)。これに対して富田川河床遺跡の試料SK01では、青色部分からは藍鉄鉱が検出されたが、褐色部分からは針鉄鉱( $\text{FeOOH}$ )が検出された。また、柱穴内の赤色顔料では、赤鉄鉱の鋭利なピークが検出された。

#### 5. 電子顕微鏡観察

次に、赤色を呈する各試料については、走査型電子顕微鏡(SEM)にて、粒形の観察を行った。顕微鏡は日立製作所製S-4500型を用い、金蒸着した状態で試料観察した。

北野他<sup>(7)</sup>によると、ベンガラと呼ばれる赤色顔料である赤鉄鉱の粒子を走査型電子顕微鏡で観察すると、製法または入手法の違いに起因した、粒形の違いが見出されると報告されている(図9)。今回の試料のうち、遺構面の柱穴内に認められた、恐らくは建物を塗装していた赤色顔料と判断されるものは、粒度や粒形がよく揃っており(図10-A)、報告されている中ではいわゆる鉄丹ベンガラと呼ばれるタイプの人造ベンガラ<sup>(2)</sup>の形状(図10-C)と類似した状況が観察された。これに対し、鉄製品(遺物番号1539)表面の赤色部分を走査型電子顕微鏡で観察すると、一部に上記赤色顔料と類似した組織が認められる部分が存在する(図10-D)が、場所によってはそれとは異なる、不定形の部分も存在した(図10-B)。

#### 6. 考察

##### 6.1. 藍鉄鉱の形成

藍鉄鉱は、酸化的環境である通常の大気条件下では、金属鉄の鏽として容易に表面に形成されるような鉱物ではないため、普通は還元的な埋蔵環境で後天的に表面に沈着した物質と考えられる場合が多い<sup>(4)</sup>。青木遺跡の場合も、包含層の状況などから当該試料は低地の還元的な環境に長期間おかれていたと推定されることから、藍鉄鉱の後天的沈着は十分にあり得る状況と考えられる。つまり藍鉄鉱は、当時の使用環境で鉄製品が鏽びて形成された物質と考えるよりは、それが破棄されて以後、埋蔵環境の中で現在に至るまでの間に表面に沈着した物質と解釈されよう。

ただし、藍鉄鉱のすぐ内側に認められるのが、富田川河床遺跡のように一般的な鉄鏽である針鉄鉱ではなく赤鉄鉱であり、それもX線回折で鋭利なピークを持つ点が、青木遺跡の試料の大きな特徴と思われる。赤鉄鉱は熱力学的に、藍鉄鉱が形成される同じ条件下で同時に形成され得ない鉱物である。従って、明確な上下関係を持って藍鉄鉱に覆われている(図2)赤鉄鉱は、藍鉄鉱が表面に沈着する前の段階からこの鉄製品表面に存在していたと考えられる。しかしながら遺跡の状況から、埋蔵環境が途中で大きく変化したとは考えにくく、また試料において赤鉄鉱は、決して局所的ではなく層状にはぼ遺物全体を覆って存在している(図2)。このことは、赤鉄鉱はこの試料が廃棄されて埋蔵された当初から既に表面に存在しており、その後に埋蔵環境の下でそれを覆いながら藍鉄鉱が沈着していったことを示していると考えられる。

ところが、赤鉄鉱という鉱物も、温帶の大気条件下で鉄の表面に容易に形成されやすい錆とは考えにくい<sup>(8)</sup>。特に今回の場合には、X線的に非常に鋭利なピークを持つ、結晶度のよい赤鉄鉱が遺物表面全体をほぼ覆って形成されている状況を考えると、問題の試料は、火を受けている可能性が強く示唆されるものである。一方で遺構面の状況から、それぞれ異なる位置、層準から出土している赤鉄鉱を伴う鉄製品全てが、たまたま火災に遭っているとは考えにくい<sup>(1)</sup>ことから、何らかの事情で、二十余点に及ぶ鉄製品が、系統的に火を受けて表面に赤鉄鉱が形成される状況を想定する必要があるだろう。

### 6.1. 赤鉄鉱の形成

一方で、同遺跡で柱穴内に認められた、恐らくは建物を塗装していたと考えられる赤色顔料もまた、結晶度のよい赤鉄鉱であるが、その粒子の形状は、鉄丹ベンガラの粒子と類似している。鉄丹ベンガラとは、遅くとも近世中頃には知られているベンガラの人工的な製法で、意図的に錆びさせた鉄製品を焼くことで得られる赤鉄鉱を、顔料として用いる技法である<sup>(2)</sup>。むろん電子顕微鏡下で見た粒子形状の類似だけを根拠に、これが鉄丹ベンガラであると断定することはできないが、少なくとも知られている他の製法または入手法で得られるベンガラとは異なる形状を示しており、これが鉄丹ベンガラである可能性については十分検討に値すると言える。

さて、青木遺跡という一つの遺跡において、片方では出土鉄製品の少なからぬものが系統的に火を受けた状況が想定され、もう片方では、建物の塗装に用いられたと見られる顔料が、鉄錆を焼いて作られたものである可能性が考えられたことになる。実際に、出土した鉄製品表面に存在する赤鉄鉱粒子にも、一部には上記鉄丹ベンガラと類似した形状を示す部分が認められた。これだけの事実だと、鉄製品表面にも柱に用いられたものと同様の赤色顔料が人為的に塗られた可能性も残されるが、鉄製品表面には、それとは異なる見かけの粒子も混在していた。つまり、もしもこれも人為的に塗られたと解釈するのであれば、鉄製品表面に塗布する場合だけは、鉄錆を焼いて作られた顔料に特徴的な形状を持つ粒子を、そうでない形状を持つ粒子と予め混ぜて用いたと解釈しなくてはならないことになる。それよりは、鉄錆を焼いて顔料を製作する場合に、表面付近には粒形の揃った良質の部分ができるが、内部には不均質な部分ができてしまい、その良質な部分が顔料として用いられた後の鉄製品表面には、良質な粒子とそうでない粒子とが混在する状況で残されていると解釈する方が自然であろう。

以上から、ここで一つの仮説を提示すると、青木遺跡における赤鉄鉱を伴う鉄製品は、鉄丹ベンガラを製造するために利用されたものの残骸である可能性が考えられる。すなわち、錆びた状態の鉄製品が人為的に系統的に焼かれ、その表面の良質な赤色部分が建物の塗装顔料などに用いられ、残った部分は廃棄され、後に還元的な埋蔵環境の下で表面に藍鉄鉱が沈着していったのではないかと推定される。むろん、今のところはこの仮説を証明できる段階にはないものの、もしもそうであるならば、鉄丹ベンガラの技法が従来知られている<sup>(2)</sup>よりも古くから存在していたことを示すことになり、またその場合には、青木遺跡においてはあたかも自給自足のように、集団が自ら顔料を製造しながらそれを塗装に用いていたことになる。今後はさらに検証を進め、この仮説の妥当性について検討していく予定である。

## 7. まとめ

- ① 青木遺跡から出土した鉄製品の中で表面が鮮やかな青色を呈するものは、還元的な埋蔵環境の下で後天的に藍鉄鉱が表面に沈着したものと考えられる。
- ② 同じく鉄製品の表面が鮮やかな赤色を呈するものは、赤色顔料であるベンガラを製作するために、人為的に鉄鋸が焼かれて赤鉄鉱が形成されたものである可能性が考えられる。
- ③ 同遺跡で建物の塗装に用いられた可能性のある赤鉄鉱は、②のようにして作られた鉄丹ベンガラの先駆的なものである可能性があり、その場合には自給自足のようにして顔料が製作されてその場で用いられていたことになる。

## 謝辞

本研究における現地調査においては、島根県埋蔵文化財調査センターの伊藤智氏と、島根県立博物館の松本岩雄氏に便宜をお図りいただき、一部試料の提供を受けた。また、藍鉄鉱の鉱物としての性質に関して、東京大学総合研究博物館の松山文彦氏と東京大学の荻原成騎氏から有益な情報をご教示いただいた。以上を記して御礼申し上げます。

## 引用文献

- (1) 島根県埋蔵文化財調査センター (2002) 青木遺跡調査概報
- (2) 北野信彦・肥塚隆保 (1998) 江戸時代における鉄丹ベンガラの製法に関する復元的実験, 古文化財の科学, 42, 26-34
- (3) 島根県教育委員会 (1984) 富田川河床遺跡発掘調査報告書
- (4) 江本義理 (1993) 文化財をまもる, アグネ技術センター
- (5) 朽津信明 (1997) X線分析顕微鏡による文化財試料の分析, 保存科学, 36, 91-94
- (6) 朽津信明 (1995) 吉佐山根1号墳及び穴神1号横穴墓における赤色顔料, 平ラII遺跡・吉佐山根1号墳・穴神横穴墓群 一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財調査報告書, 10, 143-150
- (7) 北野信彦・朽津信明・辻賢三 (2003) 平等院鳳凰堂の外観塗装材料に関する文化財保存学的考察, 平等院 (2003) 平等院庭園保存整備報告書, 116-127
- (8) 松尾新一郎監訳 (1971) 風化—その理論と実態—, ラテイス



## 第6章 まとめ

青木遺跡は北山山系から流れ出る河川によって構成された扇状地の縁辺部に位置し、また中国山地から出雲平野に流れ出た斐伊川が東に向かって大きく流れを変える屈曲部分のすぐ北に位置する。現在北山の湯屋谷から流れ出る湯屋谷川は、東方の平田市方面に流れているが、現在の流れに定まったのは17世紀の中頃と推測されており、それまでは南西に流れ、青木遺跡の近辺を流れていたと思われる。また青木遺跡の調査では、湯屋谷川の氾濫による影響（河道跡などレキ層の堆積）を古代以降確認している。また斐伊川についても現在の流れにはほぼ定まったのは17世紀の前半であり、それまでは遺跡の南まで流れ出た後、いくつかの小河川に分かれる状況で、日本海側に流れ出るルートもあったと考えられている。

遺跡の初現期は弥生時代前期と考えているが、今回は古代末から近世初めの遺構について言及する。遺跡は前述した河川等の影響を受けており、遺構面は3面確認している。第1遺構面は耕作土下のレキ層上面で、肥前系唐津の皿等の出土する17世紀初め頃と考えている。遺構は掘立柱建物、加工段、石組みの土坑、集石等を確認している。第2遺構面はレキ層下の上面で、備前・播鉢（間壁IV期：14世紀後葉から15世紀前葉）や龍泉窯系椀（上田C-2類：15世紀前半から15世紀後葉）の出土する14世紀後葉以降と考えている。遺構は掘立柱建物、溝、土坑等を確認している。第3遺構面は第2遺構面下の青灰色粘質土上面であり、白磁・椀（山本IV類：11世紀後半から12世紀前半）などの輸入陶磁器、瓷器系陶器・甕類（12世紀から13世紀）が多く出土する12世紀から13世紀の遺構面である。遺構は掘立柱建物、溝、土坑、土器溜等を確認している。（ID区及びII A区においては第2遺構面及び第3遺構面の分層ができなかったので、第2遺構面として一括して報告している。）

### ・建物について

ID区及びII A区の掘立柱建物の多くは、古代末から中世初めにかけての時期のものと推測する。またII A区の建物はおよそ6種類に分類できる。

- ① 2面庇建物 ..... 北東に庇（または縁側）を持つ建物（建物1・建物12）
- ② 4×2間側柱建物 ..... 面積約40m<sup>2</sup>（建物5・建物11・建物17・建物22）
- ③ 3×3間総柱建物 ..... 面積約40m<sup>2</sup>（建物3）
- ④ 3×2間側柱建物 ..... 面積約20m<sup>2</sup>（建物13・建物18）
- ⑤ 2×2間総柱建物 ..... 面積約16m<sup>2</sup>（建物6・建物7・建物8・建物14）
- ⑥ ①～⑤以外の建物

古代末から中世初めの時期（山本編年C～D期、C期：11世紀後半～12世紀前半、D期：12世紀中頃～12世紀後半）には調査区全域に建物が広がっており、特に集中するのはID区中央部（E15を中心とする部分）、II A区東側（K10を中心とする部分及びL10を中心とする部分）である。またそれに対しIC区の西側は建物が少なく、他の空間と意図的に分けられていたと思われる。その中に1間×1間（0.8m×0.75m）の特殊な建物があり、この区画は祭祀等の空間であった可能性が考えられる。

#### ・輸入陶磁の出土状況について（ⅠD区・Ⅱ区）

青木遺跡出土白磁・青磁・陶器のグリッド別数量表と青木遺跡調査区配置図をp345からp347に示した。破片1点を1カウントとし、接合できたものに関しては接合後の遺物を1点とした。平面的な出土傾向としては、大まかに見ると調査区全体から出土している。ⅠD区では遺跡の中央でやや集中する傾向がある。Ⅱ区では調査区東よりの北側と調査区南側中央の柱穴を多く確認した周辺は多く、調査区西側は比較的少ない。また時期的に出土傾向を見ると古代末から中世初め頃の遺物が多く、山本編年C～D期（C期：11世紀後半～12世紀前半、D期：12世紀中頃～12世紀後半）のカウント数の比率を見るとⅠD区においては、白磁・青磁全体の約67%、Ⅱ区では白磁・青磁全体の約70%を数える。また表にはカウントしていないが中世後半と思われる青花の出土数は、ⅠD区で7点、Ⅱ区で13点である。このことから白磁・青磁を中心に見た場合、12世紀代の出土が多く、以後減少はしているが16世紀代まで出土している。

#### ・中世陶器・中世須恵器の出土について

常滑、越前、信楽など12世紀から13世紀頃と考えられる瓷器系陶器（大甕、壺、擂鉢など）が多く出土しており、産地からの大量搬入が確認できる。このことから当時、青木遺跡の近辺に湾港機能を備えた場所があったことが想定される。また同時期の備前・擂鉢も出土している。

また中世須恵器では魚住窯の鉢、勝間田窯と思われる甕も出土している。さらに胎土分析の結果などにより、東播系、亀山窯、勝間田窯などではないと思われる格子目タタキ痕を持つ甕も多く出土している。これらは亀山窯、勝間田窯等の影響を受けた在地産の可能性も含めて考えていく必要があると思われる。

#### ・赤色物質について

理化学分析でも触れた赤色物質の付着した鉄製品や赤色物質だけでの出土を確認している。出土場所は土坑7、一部の柱穴及び中世の包含層である。青木遺跡において、赤色顔料が作られていたか、また柱等に塗布されていたかは発掘調査では確認できなかった。

#### ・木簡について

木簡「京世ひ」は、京済を表し、京済とは『段銭を守護の手を経ずに京都に置いて直接幕府に納入する権利であり、納入者にとっては負担の軽減となる。』とある。段銭の初見期は鎌倉時代後期であるが、段銭としての負荷が一般化するのは南北朝時代以降とされており、この場合幕府とは室町幕府と考えられる。戦国時代になると守護による京済特権領域の包摂が行われている。以上のことからこの木簡の時期は室町時代と思われ、有力寺社、公家や將軍近習、奉公衆もしくは守護、または在地の有力勢力などの存在が考えられる。

また木簡「かや九百 ふ」は『かや』が①樹木、②茅、③蚊帳のいずれかまたは別のものを指すかは分からぬが付札木簡であることが考えられる。この木簡より、物資の集積機能をもった施設の存在の可能性が考えられる。

## 青木遺跡 I D区出土陶磁器 グリッド別数量表

## 白磁

種別	器種	分類	B16	C14	C15	C16	C17	D13	D14	D15	D16	D17	E12	E13	E14	E15	E16	E17	F12	F13	ID区群	不明	計	
白磁	碗	II類(広東)								2		1			2				1	2	4	30	5	
		IV類	2		1	3			3	3	4	1		3	1	1	1		1	2		2	0	
		V類												1								1	0	
		VI類									1											1	0	
		VII類								1												1	2	
		IX類													1							1	2	
		X I類?																				0	0	
		II or X I類																				0	0	
		(C期)									2	1		1	1	2					1	8	0	
		(D期)																				0	0	
		(C・D期)													1	1					3	5	0	
		C類																				1	0	
		D類									1											1	0	
		E類									1				1						1	3	0	
		不明																				1	0	
	皿	VI類																1				1	5	
		IX類													2	1	1					2	3	
		(C期)									1											1	0	
		(C・D期)									1											1	0	
		C類																				1	0	
		D類								1		2		1							1	6	0	
		E類								2		1		1							1	5	0	
		不明																			1	1	2	
	不明(碗・皿)	廣東系	1	2						4					1	1					1	1	11	
		(C・D期)								1	1	5	4	6	2	1	4	3	4	2	1	1	3	46
		(14C以降)								1													1	
	壺	III類									1	1					1						3	
	小壺																					2	3	
	合子													1				1					2	
	合子or皿																						0	
	不明																	1					2	
	合計		2	0	3	9	2	0	19	13	14	3	1	11	10	17	6	3	0	2	12	23	150	

※分類は、山本編年(太宰府条坊跡XV 2000 太宰府教育委員会)、森田勉(概説 中世の土器・陶磁器)より

## 青磁

種別	器種	分類	B16	C14	C15	C16	C17	D13	D14	D15	D16	D17	E12	E13	E14	E15	E16	E17	F12	F13	ID区群	不明	計	
龍泉窯系	碗	I類								1	3	1	1	1	1	1	1	1	1		2	4	15	
青磁		II類								1										1	2	8	3	
		III類																				1	2	
		IV類																				0	0	
		I or II類																				1	1	
		I ~ IV類																				1	1	
		I or IV類																				0	0	
		II or III類																				1	3	
		II ~ IV類																				1	3	
		III類以降	1											1	1							1	1	
		IV類or B - II類										1										1	6	
		IV類以降								1					1	3						1	0	
		B - II類																				0	0	
		B - III類																				0	0	
		B - IV類																				0	0	
		B - III~B - IV類																				0	0	
		C - II類																				0	0	
		C - III類															1					1	0	
		不明																				0	0	
	小碗	III or IV類									1											1	1	
	环	III類													1							0	0	
	皿	I類																				0	0	
		不明																				1	1	
		稜花皿									1											0	0	
	不明											1										1	0	
同案窯系	碗													2		2	1	1		1	2	9	2	
青磁	皿																					1	2	
	不明																					0	0	
不明青磁	不明											1										1	2	
	碗																					0	0	
青磁・白磁?	青磁・白磁?																					1	1	
	合計		0	1	0	1	1	0	0	5	5	3	3	0	5	9	2	1	0	1	1	6	16	60

※分類は、山本編年(太宰府条坊跡XV 2000 太宰府教育委員会)、上田秀夫(「14~16世紀の青磁の分類について」『貿易陶磁器研究No.2』)より

## 青白磁・陶器

種別	器種	分類	B16	C14	C15	C16	C17	D13	D14	D15	D16	D17	E12	E13	E14	E15	E16	E17	F12	F13	ID区群	不明	計	
青白磁	青白磁・皿	皿																					0	
	小壺	小壺																					2	
	合子	合子			1								1	2			1	1	1				1	8
	皿or碗	皿or碗																					0	
	不明	不明																					0	
陶器	陶器・壺類	B群																					0	
		C群																					0	
		不明																					0	
	盤(不明)	不明																					0	
	天目茶碗																						0	
	茶入れ?																						0	
	不明																						0	
	合計		0	0	1	0	0	0	0	0	1	2	0	0	1	1	1	1	0	0	0	0	3	10

※分類は、山本編年(太宰府条坊跡XV 2000 太宰府教育委員会)

総計	2	1	4	10	3	0	24	19	19	
----	---	---	---	----	---	---	----	----	----	--

青木遺跡Ⅱ区出土陶磁器 グリッド別数量表

白磁

種別	器種	分類	J10	J11	J12	K8	K9	K10	K11	K12	L7	L8	L9	L10	L11	L12	M7	M8	M9	M10	N8	N9	N10	不明	計
白磁	椀	II類(広東)							1		1		1	1					1				2	7	
		IV類		3	1				6	4	3			1	13	9				1	2	1		2	46
		V類		1	1				1	1				1	2					1				8	
		VI類																						0	
		VII類							1	1				1										4	
		IX類																						1	
		XI類?													1									1	
		II or XI類									1													1	
		(C期)													1									1	
		(D期)																						2	
		(C・D期)							3	1	3			1	2	2	1							1	
		C類																						0	
		D類																						0	
		E類									1												2		
		不明																		1				0	
	皿	VI類														3	1			1	2			7	
		IX類		1	1		1	1	1					1	2									8	
		(C期)									1	1					1							3	
		(C・D期)												2	1									3	
		C類												2			1							0	
		D類																						3	
		E類									1												1		
		不明												1										2	
	不明(椀・皿)	広東系									1	2				1	3							7	
		(C・D期)		2	3		3	15	8	12	1	2	2	19	16	2		8	5	7	2		16	123	
		(14C以降)							2															3	
	壺	III類																						0	
	小壺																							0	
	合子										1			1										2	
	合子or皿																							0	
	不明										1													2	
	合計		0	7	6	0	4	28	24	22	1	3	5	49	38	5	0	11	8	12	5	0	0	23	251

※分類は、山本編年(太宰府条坊跡XV 2000 太宰府教育委員会)、森田勉(概説 中世の土器・陶磁器)より

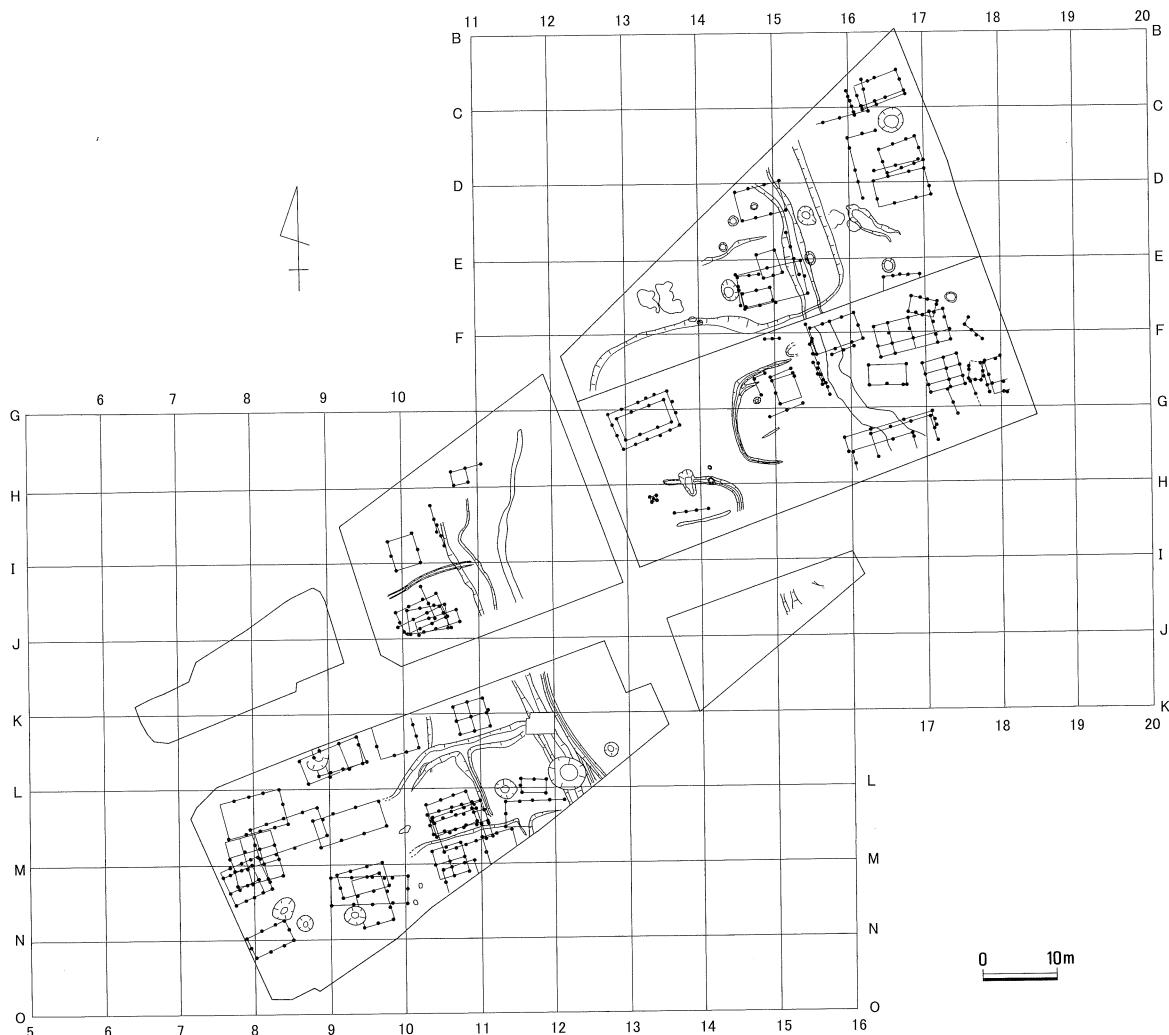
青磁

種別	器種	分類	J10	J11	J12	K8	K9	K10	K11	K12	L7	L8	L9	L10	L11	L12	M7	M8	M9	M10	N8	N9	N10	不明	計
龍泉窯系	椀	I類		1	1			4	2		1	2	1	2			3	1	1					6	25
青磁		II類		3	2			1	6		1	1	6	3			2	3		1				7	36
		III類	1	1				2	4	1			1											9	
		IV類											2											1	
		I or II類											1											1	
		I ~ IV類											1						1					2	
		I or IV類																	1					1	
		II or III類																	1					1	
		II ~ IV類						1		1			1		1								2	7	
		III類以降																						0	
		IV類orB-II類																						0	
		IV類以降	1										1											4	
		B-II類											1											0	
		B-III類																						1	
		B-IV類								1														1	
		B-III~B-IV類																						0	
		C-II類	1																					1	
		C-III類																						0	
		不明																						0	
	小椀	III or IV類																						0	
	壺	III類	1																					1	
	不明												1			1								2	
	皿	I類											1											1	
	不明																							0	
	稜花皿																							0	
	不明																							0	
同案窯系	椀		1											4	3			1	2					2	15
青磁													2					1						5	
不明青磁	不明												1											0	
青磁・白磁?	青磁・白磁?													2	1	1			1					6	
		碗																	1					1	
	青磁・白磁?	青磁・白磁?	1	9	3	0	1	11	14	4	0	2	4	23	10	1	0	8	8	5	2	0	0	0	1
	合計		0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	3	

※分類は、山本編年(太宰府条坊跡XV 2000 太宰府教育委員会)、上田秀夫(「14~16世紀の青磁の分類について」『貿易陶磁器研究No2』)より

青白磁・陶器

種別	器種	分類	J10	J11	J12	K8	K9	K10	K11	K12	L7	L8	L9	L10	L11	L12	M7	M8	M9	M10	N8	N9	N10	不明	計
青白磁	青白磁・皿	皿							1						1									2	
	小壺	小壺																						0	
	合子	合子																						0	
	皿or椀	皿or椀													1									1	
	不明	不明																						0	
陶器	陶器・壺類	B群																						0	
		C群																						0	
	盤(不明)	不明																						0	
	天目茶碗																							0	
	茶入れ?																							0	
	不明																							0	
	合計		0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	3	



青木遺跡調査区配置図

## 小結

陶磁器を中心とした遺物からみると、青木遺跡は古代末から近世にかけて断続的に続く集落跡と思われ、遺物の内容・量を考えると一般の集落より経済的レベル等が上位の人や集団に関係する建物と考えられる。また鎌倉時代の九条家文書に、皇室の荘園として林木莊の記載があり、以後戦国時代まで領主は変わるが文献資料に林木莊として確認されている。林木莊は現在の出雲市東林木町・西林木町に推定されており、東林木町の東端である青木遺跡も荘園であった可能性がある。ただ今回の調査では、青木遺跡と林木莊との関係が分かるまでには至らなかった。建物の規模等を中世の朝山氏の居館と考えられている出雲市蔵小路西遺跡と比較した場合、蔵小路西遺跡は方一町の大溝に囲まれた方形居館であり、建物の規模も中心となる最大建物は約86m<sup>2</sup>あり、青木遺跡の最大建物の約2倍となっている。よって、青木遺跡における建物の特殊性を判断するまでに至らず、林木莊との関係は今後の出雲平野における中世の調査・研究を通して考えて行く必要があると思われる。

## 参考文献

- (1) 建設省出雲工事事務所 『斐伊川誌』 1995
- (2) 原 重夫 『とびす（東・西林木町） ふるさとの歴史』
- (3) 太宰府教育委員会 『太宰府条坊遺跡X V－陶磁器分類編－』 2000
- (4) 中世土器検討会 概説 『中世の土器・陶磁器』 真陽社 1997
- (5) 上田秀夫 「14～16世紀の青磁の分類について」『貿易陶磁器研究No.2』
- (6) 『島根県の地名 日本歴史地名大系33』 平凡社 1995
- (7) 島根県教育委員会 『蔵小路西遺跡』 1999

# 写 真 図 版



写真図版 1



青木遺跡 I 区・II 区 全景（上空真上から：合成）

## 写真図版 2



青木遺跡周辺（上空真上から）  
(1947年 米極東空軍撮影空中写真)

### 写真図版 3



青木遺跡 I 区・II 区（上空 南東から）

## 写真図版 4



青木遺跡 I 区・II 区（上空 北東から）



青木遺跡 I 区・II 区（上空 南西から）

## 写真図版5



II区 自然河道1完掘状況（南から）

## 写真図版 6



I 区 建物1～3（北から）

## 写真図版 7



I 区 建物7調査風景（南東から）



I 区 伊佐波神社跡石敷（北から）

## 写真図版 8



I 区土坑1 土層断面（北西から）



I 区土坑1 赤色物質検出状況

写真図版 9



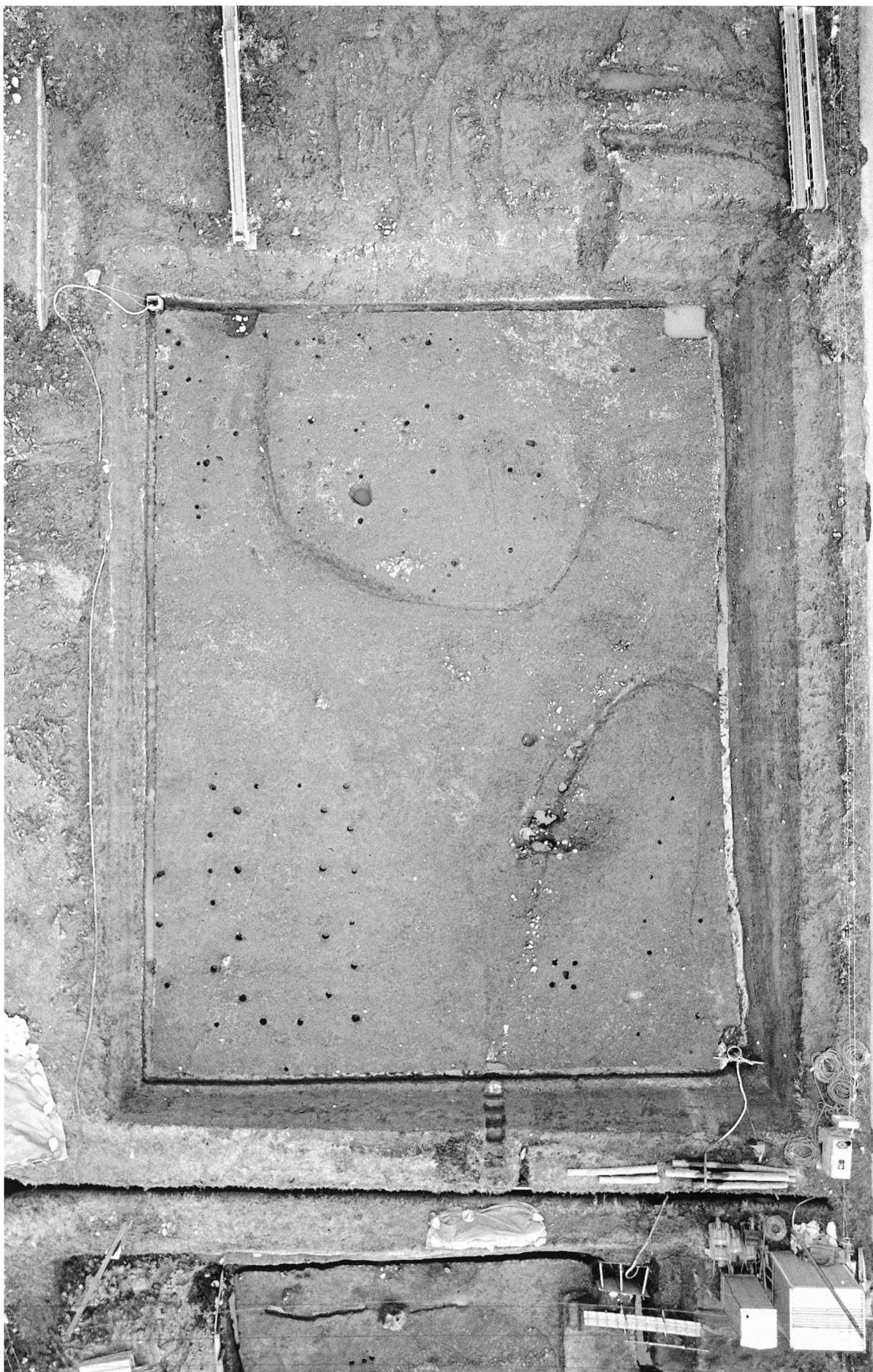
IA区（上空真上から）

## 写真図版 10



I B区（上空真上から）

写真図版 11



I C区西（上空真上から）

## 写真図版 12



I C区東（上空真上から）

写真図版 13



IA区 南壁土層断面（北から）



同上 西壁土層断面（東から）

## 写真図版 14



I B区 調査前（西から）



同上 第1遺構面（南西から）

写真図版 15



I-B区 第2遺構面（南西から）



同上 第3遺構面（南西から）

## 写真図版 16



I B区 南壁土層断面（北西から）



同上 東壁土層断面（南西から）



I C区 調査前（南から）



I C区 東側第1遺構面調査風景（南西から）

## 写真図版 18



I C区 東側第1遺構面（南西から）



同上 第2遺構面（南西から）

写真図版 19



I C区 東側南壁土層断面（北東から）



同上 東壁土層断面（南西から）

## 写真図版 20

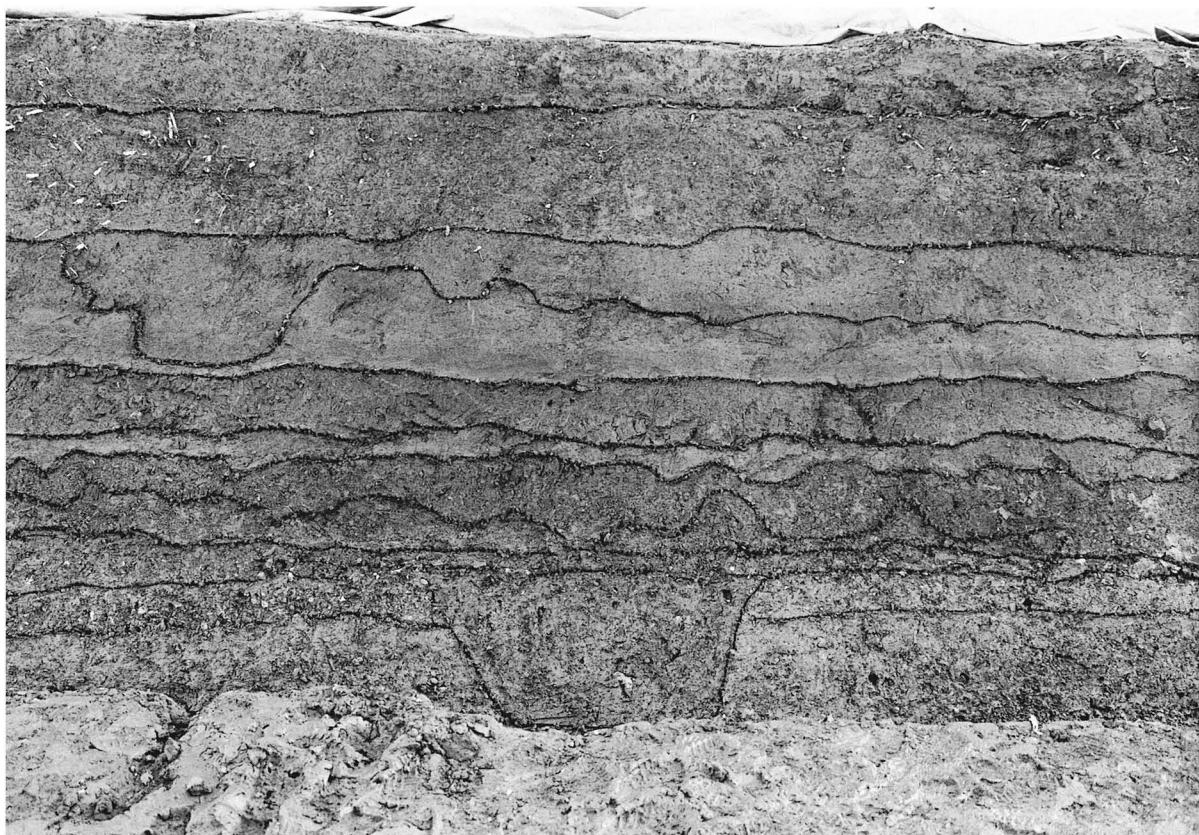


I C区 西側全景（東から）



同上 南壁土層断面（西から）

写真図版 21



I C区 西側南壁土層断面 拡大（北西から）

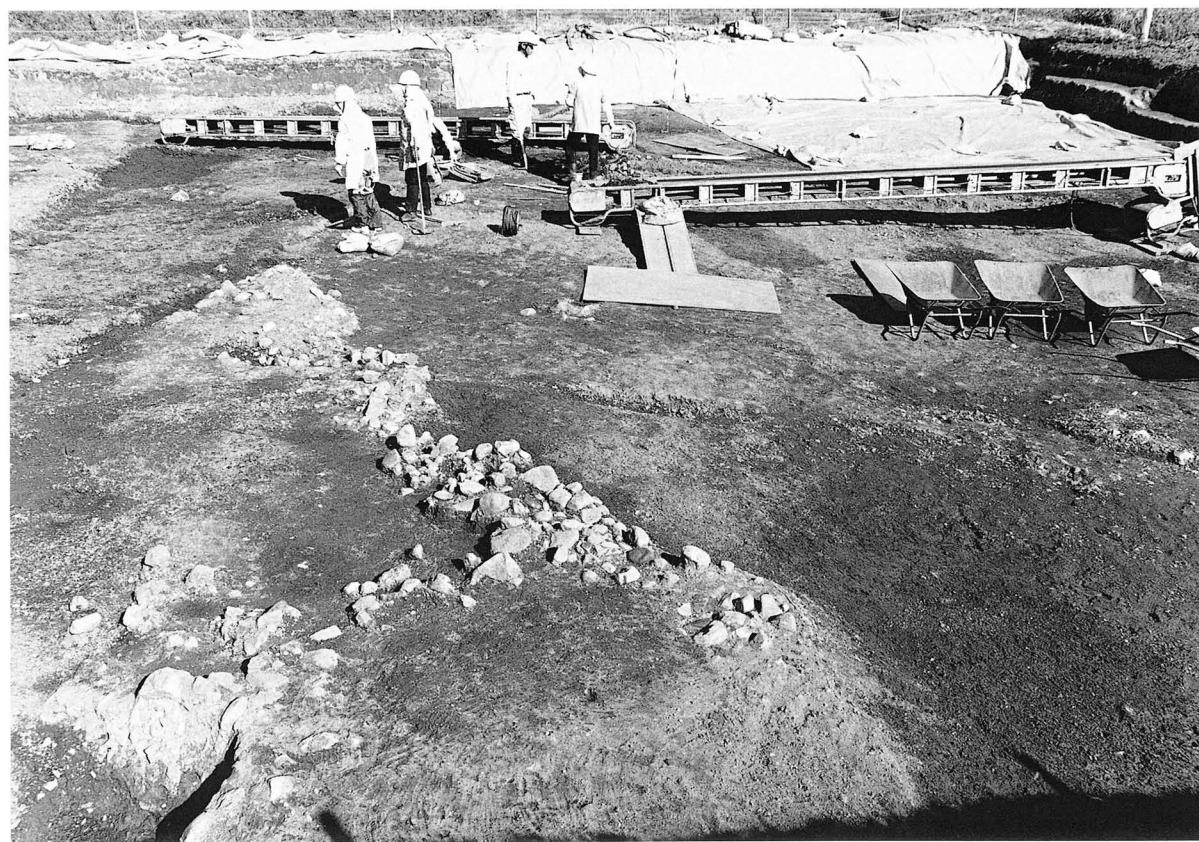


同上 河道部分（西から）

## 写真図版 22



I 区 集石2（北西から）



同 上（南から）

写真図版 23



I 区 集石2北側遺物出土状況（北から）



同上 南側遺物出土状況（北から）

## 写真図版 24



I 区 土器溜2遺物出土状況（南から）



同 上（西から）



I 区 河道1  
(南から)



同上  
(北西から)

## 写真図版 26



I 区 河道1  
北側土層断面  
(南から)



同上  
南側土層断面  
(南から)



同上  
調査風景  
(南から)



I 区 河道2（南西から）



同 上（北西から）

## 写真図版 28



I区 河道2  
北壁土層断面  
(南東から)



同上  
中央土層断面  
(南西から)

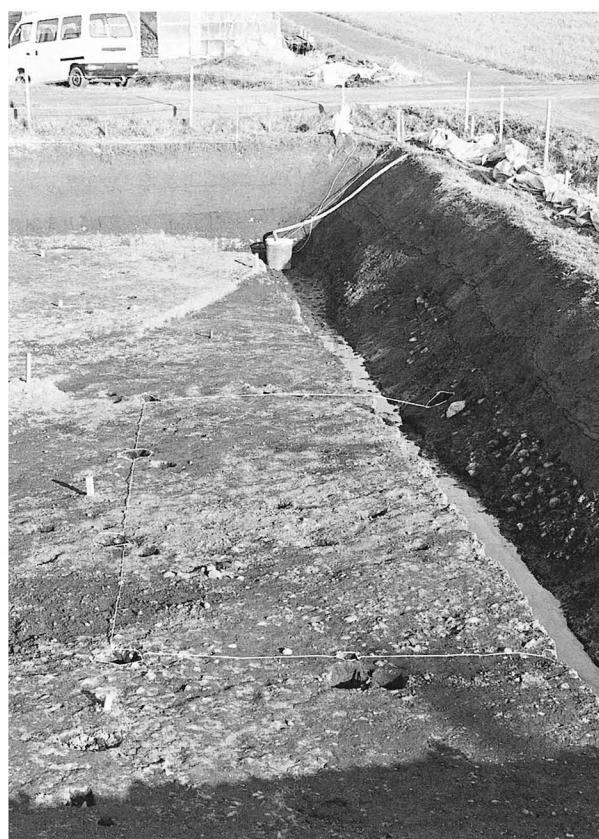


同上  
南側土層断面  
(南西から)

写真図版 29



I 区 建物6（東から）

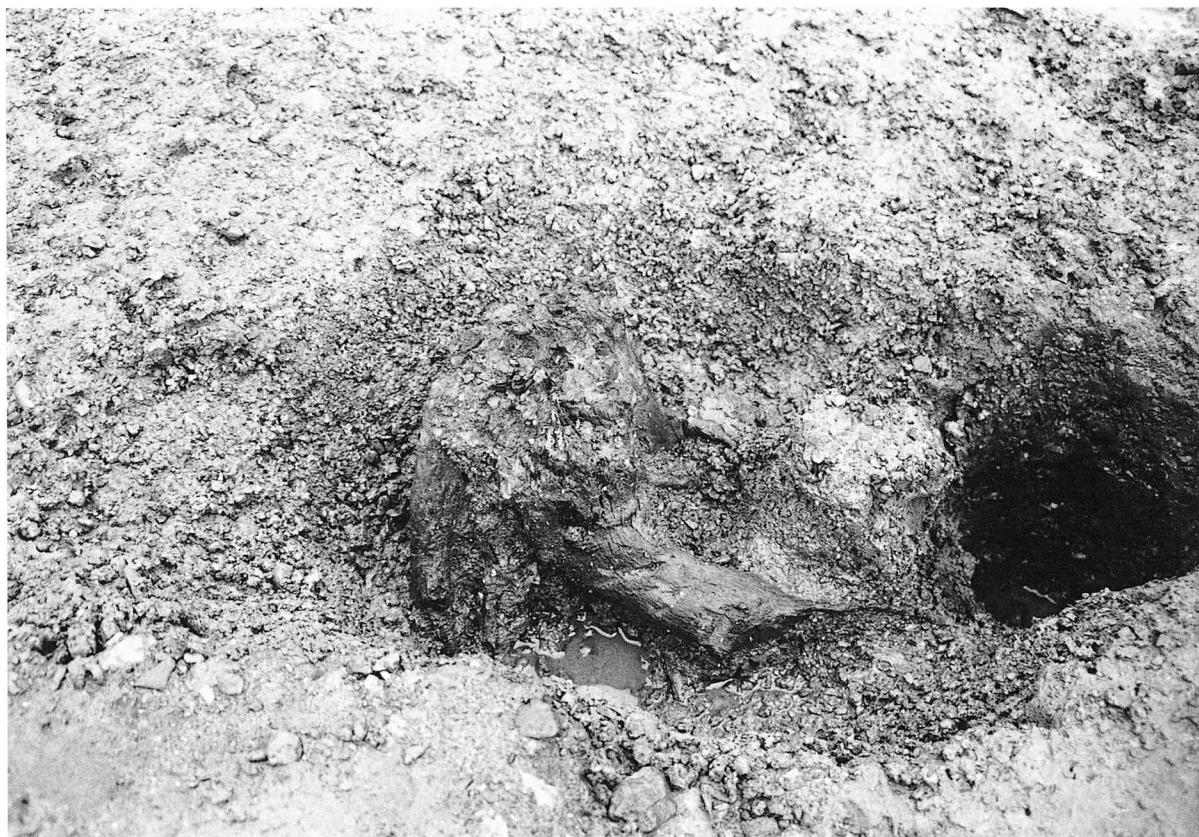


同上（西から）



同上 P674土師器出土状況（西から）

## 写真図版 30



I 区 建物9 P782とP790の自然木（南から）



I 区 建物22 P304土師器出土状況



I 区 土坑5 検出時（西から）